

日本ぐらし館 木の文化研究会 第2回シンポジウム 「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」開催

京都の木造住宅建築に関わる研究者・実務者が討論

京都に拠点を置く「日本ぐらし館 木の文化研究会」（委員長：高田光雄）が3月22日（金）、第2回シンポジウム「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」を開催し、全国の工務店ネットワーク「ジャーブネット」（主宰：株式会社アキュラホーム宮沢俊哉）が共催、株式会社アキュラホーム（本社：東京都新宿区 社長：宮沢俊哉）が協賛いたしました。

「日本ぐらし館 木の文化研究会」は、日本の伝統と京町家の居住性、そこで育まれた暮らしの文化を現代の「住宅」へ継承フィードバックしていく為の産学連合の建築・文化研究を行っています。

本シンポジウムでは、京都の木造住宅建築に関わる各方面の研究者・実務者が集い、家と庭の作り手に着目するとともに、家と庭の関係性という視点から木造住宅のあり方について講演しました。

まず、京都大学大学院教授の高田光雄氏より、「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」をテーマとした本年度の研究主題について解説。日本の住宅は本来、家と庭によって構成されているという視点から、現代住宅における庭の意味を問い直すべきという問題提起をしました。

続いて、京都工芸繊維大学准教授の矢ヶ崎善太郎氏は、「歴史にみる大工と庭師」をテーマに講演。歴史的にみる大工と庭師の仕事を紹介し、書院造と数寄屋の違いから大工と庭師の協働の始まりについて説明しました。

また、木村工務店大工棟梁の木村忠紀氏と京都庭園研究所庭師の比地黒義男氏が、それぞれ携わった事例を紹介し、パネリストである京都大学大学院教授の鉾井修一氏、京都大学大学院教授の林康裕氏、京都府立大学教授の檜谷美恵子氏などを交えて様々な視点からパネルディスカッションを行いました。

最後に、ジャーブネット主宰の宮沢俊哉が、「今回のシンポジウムはそれぞれ異なる立場の有識者の意見を伺え、色々な価値観があることを改めて感じた。作り手は『住み心地』の良いものを提供したいと考えるが、住まい手が参画する双方向のものであるとする『住みごたえ』という考えに触れるなど、新しい発見が多くあった。これらの文化の重要性を調和させながら、理想のくらしづくりを行っていききたい」と述べました。

※詳細は3頁以降に記載しております



※シンポジウムには260名が参加

<本件について報道関係からのお問い合わせ先>

株式会社アキュラホーム 広報課 堀越・若林 Email : aqura_pr@aqura.co.jp

住所 : 東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 34F TEL : 03-6302-5010 (直通) FAX : 03-5909-5560

●写真データは右記よりダウンロードすることができます <http://www.aqura.co.jp/news.html>

■ 第2回シンポジウム「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」概要

日時：2013年3月22日(金)13:00~16:30
場所：すまい・るホール 文京区後楽1-4-10 住宅金融支援機構1階
主催：日本ぐらし館株式会社
共催：ジャーブネット
協賛：株式会社アキュラホーム
後援：住宅金融支援機構
公式サイト：<http://nippongurasikan.com/>

プログラム

- 13:00~13:10 ご挨拶 八野行正様(住宅金融支援機構・理事)
- 13:10~13:40 主題解説「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」
高田光雄(京都大学大学院・教授)
- 13:40~14:20 基調講演「歴史にみる大工と庭師」
矢ヶ崎善太郎(京都工芸繊維大学・准教授)
- 14:20~14:30 休憩
- 14:30~16:20 パネルディスカッション
事例紹介1 木村忠紀(木村工務店・大工棟梁)
事例紹介2 比地黒義男(京都庭園研究所・庭師)
コーディネーター 高田光雄(前掲)
パネリスト 矢ヶ崎善太郎(前掲)、木村忠紀(前掲)、比地黒義男(前掲)、
銚井修一(京都大学大学院・教授)、林康裕(京都大学大学院・教授)、
檜谷美恵子(京都府立大学大学院・教授)
- 16:20~16:30 閉会の挨拶 宮沢俊哉(ジャーブネット主宰)
- 総合司会 野間光輪子

講師・パネリスト

主宰・総合司会

野間 光輪子(のま みわこ)
建築家/日本ぐらし株式会社 代表取締役/
祇園新橋「望月」 主宰

主題解説・コーディネーター

高田 光雄(たかだ みつお)
京都大学大学院工学研究科建築学専攻・教授

基調講演・パネリスト

矢ヶ崎 善太郎(やがさき ぜんたろう)
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
建築造形学部門・准教授

パネルディスカッション・事例紹介

木村 忠紀(きむら ただのり)
木村工務店・大工棟梁

比地黒 義男(ひちぐろ よしお)
京都庭園研究所・庭師

パネリスト

銚井 修一(ほこい しゅういち)
京都大学大学院工学研究科建築学専攻・教授

林 康裕(はやし やすひろ)
京都大学大学院工学研究科建築学専攻・教授

檜谷 美恵子(ひのきだに みえこ)
京都府立大学大学院生命環境科学研究科環境科
学専攻・教授

■ 主題解説 「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」 高田光雄氏(京都大学大学院・教授)



昨年の第1回シンポジウムでは、地域に根ざした住宅づくりの知恵を継承・発展させていくことの重要性について議論しました。京都での取組として、内外をつなぐ縁側のような空間を「環境調整空間」と呼び、その丁寧なデザインによって地域の居住文化やまちなみ景観を継承する住宅づくりを目指していることを、主として住宅の側からお話しました。今回は、「庭」も住宅を構成する重要な居住空間であるという認識のもとに、「庭との関係に学ぶ木造住宅の未来」について問題提起をします。

日本では古代から現代まで、庭を示す言葉がいくつも存在し、多彩な庭が存在していたことがわかります。例えば京町家では、「ニワ」「ツボ」「センザイ」という言葉が使われてきました。ここで「ニワ」とは土間空間のことで、表通りから奥庭までつながる「通り庭」を示します。茶庭(露地)風の前栽や玄関脇の坪庭は、鑑賞のための庭であるとともに採光や通風・換気といった環境調整のための空間でもあります。作庭については、これまでにいくつもの著名な論考がありますが、それらに学びながら現代的課題を考慮して庭について再考してみました。庭に関わる現代的課題としては「地域居住文化の継承・発展」と「地球環境への配慮」の2点があります。それらをふまえ、現代小住宅の作庭上のポイントを以下の5点にまとめてみました。①四季にとどまらない微妙な季節の変化を楽しむ、②環境調整機能の確保、③領域形成機能の確保、④住まい手が働きかけることによって生まれる「住みごたえ」の実現、⑤マネジメントとセキュリティの考慮、です。このうち、特に①と④が一般の現代住宅では不十分であり、ぜひ積極的に計画を行い、魅力的な庭を持つ住宅づくりを進めていただきたいと思います。

■ 基調講演 「歴史にみる大工と庭師」 矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学・准教授)



大工は古代からものさしをもって指図をする人であり、日本の大工の祖と言われる聖徳太子の像には差し金を携えているものがあります。庭師については、平安時代に日本最古の作庭技術書である『作庭紀』が成立し、その頃には庭を作る専門家がいたと考えられます。15世紀頃には河原者が作庭に関与し、御所や公家屋敷にも出入りしていました。庭師は、自然を読み取る優れた能力や吉凶をみる能力など、特殊な能力を持つ者と考えられていました。

日本の建築は、寝殿造でも書院造でも、原則として建物の周囲に縁を設ける伝統がありました。格式を重視した書院造の極端な例では、広縁、落縁など複数の縁を設けることによって縁にまで序列が持ち込まれました。対して、茶人たちによって作られ始めた数寄屋建築はそれとは正反対のものでした。千利休の茶室になると縁は完全に無くなり、土間から畳に直接上がる「くぐり木戸」が発明されます。このように建物の際まで露地の土間が深く入り込むことによって土庇(つちびさし)が生まれ、ここで大工と庭師の協働が始まり、軒下に豊かな空間を生む数寄屋建築が確立されていきました。縁側まわりや軒下空間など、建物の際をよく見ていただくと、桂離宮などの優れた建築では極めて丁寧にデザインされていることがわかります。

茶書には数寄屋大工の覚悟を示す言葉として、「見える部分を何気なく、見えない部分をきちんとすることで本質を間違っはいけない」、「日本の建築は常に手を入れながら維持されるものこそ良い建築である」といった言葉が見受けられます。現代の日本の木造建築は、こういった覚悟をもって仕事をしつづけてきた職人たちがいたからこそ世界に誇る伝統的な建築文化になっているのです。木造建築の伝統をつつてきた日本の職人たちの技は、世界に誇る無形の文化財でもあるのです。

■ パネルディスカッション

大工棟梁の木村忠紀氏と、庭師の比地黒義男氏それぞれが自身の手掛けた建築と庭の事例を紹介後、6名でパネルディスカッションが行われました。

木村：庭というものは和み、安らぎを感じるのが庭の効果といえます。そのためにも四季折々の木々をバランスよく植栽することが大切です。大工と庭師はそれぞれの意見をはっきり伝え、時には喧嘩してでも良いものをつくろうとすることが大事だと思います。

矢ヶ崎：都市住宅としての建物と庭の良い例として京町家の庭があります。土間である通り庭部分を庭に含めると、敷地全体のおよそ6割が床上、4割が庭という調査結果があります。密集した都市空間における庭の面積としてはかなり広いと思います。建物内に庭が大きくとられているのは、間口が狭く隣と接して建てるための施工上の要請であったとも考えられています。また、表の軒下空間は、通りと一体となったコミュニティ空間として開放され、格子やばったり床几(しょうぎ)などによって、統一されながらもバラエティに富んだまちなみを形成していました。都市型の住宅であるからこそ、庭を広くとることで豊かな生活空間になるように工夫がされてきたのだと思います。

林：家と庭の関係は構造においても大事です。庭の視界を遮らず、庭を効果的に見せるもしくは隠すといったことを考える際、開口をどのように設けるかは構造設計上も重要なポイントとなります。また、庭(木)を制御することも大切です。大きな木の成長や落葉は、建物との位置関係により建物を傷める可能性もあるからです。

銚井：環境工学的には、これまで、蒸散による冷却効果や通風を促す場として庭の機能を捉えていました。最近ではさらに、庭や建物下の地盤の熱容量に着目して放熱を促す場としてヒートアイランド対策に積極的な活用ができないかと考えています。

比地黒：仕上げをどうするかは施主の好みによって十人十色で、予算的な制約もあります。しかし、コストを抑えながら四季折々の自然を感じられる空間を提案することは可能です。庭は生き物であり、建築とは異なる感性に働きかけます。五感を育てることは子どもにも良い影響を与えます。また、西側には落葉樹を植えるなど、庭の仕上げ方によって機能面で室内環境に良い影響を与えることもできます。

檜谷：私は住まい手の観点から、家と庭の関係について発言したいと思います。研究会で美しい庭を訪れるたびに感じたのは、これを誰が「維持管理」するのだろう、ということです。多くの人々が「庭付き一戸建て」を取得しようとした時代には、主婦がハウスキーピングを担うと当然のように考えられていました。しかし、現在ではこのような想定は成り立ちません。高齢化が進展するなか、維持管理の問題は深刻化する一方です。これからの社会では、庭を、各戸に閉じたプライベートな空間とみるのではなく、集合としての庭の意味やまちから庭の可能性を考える視点を持つ必要があります。それが庭と家を適切に維持していくことに役立つと思います。

木村：維持管理については、まずは施主を教育する必要があります。家の場合、メンテナンスして初めて30年、50年と維持できるものであることを今の施主の多くが教育・継承されていません。強く伝えていくべきです。

比地黒：庭師は作庭後も何度も出入りしますが、庭に関しては施主自身で管理できるものも多数あります。我々は作庭するときに施主と相談して、施主に合わせて管理のしやすいものを提案しています。

矢ヶ崎：今のお話であった「出入り」というキーワードはとても大切だと思います。日本の木造建築が健全な状態を維持するためには手入れとそうじが重要です。施主は当然そうした意識を持たなければなりませんし、こういう仕事を作っていくことで大工さんの技能や技術も継承していくことができます。

林：私も教育が大切だと思いますが、どう教えていくかを考えなくてははいけません。木の名前をほとんど知らない



といったことが今は普通になっています。文化として育てていく必要があります。もう一つは、住まい手にとって利益になると同時に、職人の仕事として儲かる仕組みをつくっていかなければならないという点があります。

檜谷：教育の面でお話すると、最近はランドスケープ(屋外空間)に高い関心を示す学生も増えています。必ずしもメンテナンスし易くなくても、庭に手を入れて緑と関わる住まい方を好む感覚の芽を感じます。庭を愛でる文化を一部の人だけの領域にするのではなく、一般にも広げられるような取り組みが必要です。また、一時的なものではなく持続的な仕組みとすることを考える時、家に人を招くという文化を見直すことが大切で、そこにヒントがあるように思います。

木村：今は設計士が図面を作り、大工が家をつくることになりませんが、設計士にはもっと勉強して欲しいと思います。木の名前も知らない設計士が未だにいます。設計の技術を磨く努力をして、質を高めて欲しいというのが大工からの希望です。

高田：今日は家と庭との関係というテーマで議論を行いました。家と庭の関係を改善するためには、つくり手と住まい手、大工と庭師の関係、社会の仕組みまで広げて考えていかなければいけません。研究会ではこうした議論を重ね、具体的な提案に結びつけていきたいと考えています。次年度を楽しみにしていただければ幸いです。

■ 日本ぐらし館

日本ぐらし株式会社が主催する「日本ぐらし館」は、日本の伝統と京町家の居住性、またそこで育まれた暮らしの文化を現代の「住宅」へ継承フィードバックしていくための産学連合の建築・文化研究をおこなうことを目的に祇園新橋「望月」に設立されました。「日本ぐらし館」の活動のひとつである「木の文化研究会」は、京都の建築関係専門家が集い、平成23年5月に発足しました。この研究会では、豊かな居住文化を伝える伝統的な木造住宅に学び、その知恵を広く現代の住まいづくりに活かし、新たな日本の住宅のスタンダードを確立するための研究をおこなっています。

■ ジャーブネット(JAHBnet)

ジャーブネットは全国350社の工務店・ビルダー加盟する工務店ネットワーク組織。アキュラホームが94年に独自の住宅建設合理化ノウハウを体系化した「アキュラシステム」を開発。これまでに約2600社の全国の工務店に導入されると共に、98年に(財)日本住宅・木材技術センターの「木造住宅供給支援システム」に認定され、その仕組みをもって工務店組織「アキュラネット」(現ジャーブネット)を設立。全国規模のネットワークによるスケールメリット、地域密着企業ならではのダイレクトサービスを併せ持つネットワークとしてすでに10年以上にわたり全国のユーザーに「良質な住宅を適性価格」で提供。